

第6回 東アジア・中央アジア分科会 議事録

日時:2009年7月17日(金) 15:00 - 17:30

出席者:青木繁夫、沢田正昭、渡辺邦夫、高浜秀(以上、東アジア・中央アジア分科会委員)、前田耕作(特別参加)、加藤九祚(特別報告)、八木和広、田中健太郎(以上、文化庁)、福嶋香代子、守山弘子(以上、外務省)、清水真一、山内和也、影山悦子、松岡秋子、安倍雅史(以上、東京文化財研究所)、七海由美子、田代亜紀子(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

1. シルクロード専門家会議報告

山内和也(東京文化財研究所)

報告:2009年5月18日から24日カザフスタンのアルマトイにおいて開催された「シルクロード世界遺産シリアル推薦第5回ユネスコ地域ワークショップ」には、日本より外務省広報文化交流部国際文化協力室安東室長、東京文化財研究所から山内が参加した。本ワークショップは、2002年11月の西安において開催されたシルクロード国際学術シンポジウムの際の平山郁夫先生の提唱に端を発するもので、2010年の世界遺産推薦を目指して中国及び中央アジア五カ国(ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン)とユネスコやイコモスが協力し開催している準備会合である。シルクロードは東西南北に延びる壮大なルートであり、まずは中国および中央アジア5カ国から構成資産をピックアップして推薦することとなっているが、そもそもシルクロードの概念そのものも「西安以西」と限定的にとらえられており、日本からはこれに異を唱えていた。2008年6月の西安会議においては、日本として少なくともシルクロードの概念は日本まで含む広範なものとするのが、歴史的事実にも、またシルクロード世界遺産推薦の趣旨にも沿うと主張し、これが認められてシルクロードのコンセプトは日本まで含む広いものとする事で各国の賛同を得ている。今回のワークショップでは、「顕著な普遍的価値」の記述、「真正性」「完全性」及び保護管理の記述、シルクロードのシリアル世界遺産推薦のための調整委員会の設立、今後のタイムラインが決定された。調整委員会は、中央アジア五カ国、中国のほかに、アフガニスタン、インド、イラン日本およびネパールの代表により構成され、第1回会合は、2009年10月に中国の西安で実施される予定である。共同推薦国の間で準備の進捗にはばらつきが見られ、日本政府はユネスコ信託基金を通じて特に準備が難航している中央アジア各国に対し、ドキュメント作成のための測量や調査支援を行う旨表明した。具体的には、カザフスタンについては地下探査調査、ウズベキスタンについては地理情報、他3カ国に対しては、考古学・建築調査実施に関する協力ができるのではないかと考えている。

・世界遺産申請では、複数の遺跡が推薦されるのか。そのなかには、日本が関わった遺跡はある

のか。

⇒ トルクメニスタンは15、タジキスタンは8つ、キルギスタンは10前後リストにあげてきた。そのなかでもプラスナ・レーチカやアジナ・テパについては、日本が協力していた遺跡である。

・どの遺跡をシリアルノミネーションに含めるかということはまだわからないのだろうか。

⇒ 道として登録する場合は、「道」の概念がまずあり、それにあわせて遺跡をあげていくのが順番だが、今回は各国の思惑としてまず世界遺産に登録したい遺跡が先にあり、それらを「シルクロード」としてつなげようとしている趣であり、概念との整合性作りに相当苦労するものと思われる。

・調整委員会への日本からの参加者を要検討。さらに今回のノミネーションだけではなく、将来の拡張登録についても今後具体的に考えていかなければならない。

・日本の協力としては、特定の遺跡に対しての支援か、仏教遺跡に特定した支援となるのか、それとも大きい枠組みのなかでの協力か。

⇒ 現在中央アジア各国と協議中。各国ともに申請したい遺跡内容は違うので、仏教遺跡ということで特定することもできないであろう。

2. モンゴルに対する文化遺産国際協力について

清水真一(東京文化財研究所)

報告:文化庁委託拠点交流事業として2008年度よりモンゴルに対する事業を実施している。今年度はモンゴルに対する建造物保存修復および石造文化財保存修復研修プロジェクトを行う予定である。2009年度は建造物保存修復プロジェクトとして、7月20日から日本人専門家の派遣をおこない、ベレーヴェンという寺院における彩色塗装についての調査、技術移転を行う。8月には、アマルバヤスガラント寺院修理設計・調査についての技術移転をモンゴルの学生を対象に行う。

石造文化財保存修復研修プロジェクトは、2回のミッションが派遣される予定である。アラシャンハダ遺跡における碑文劣化状態調査、ヘンティ県のセルベンハールガ遺跡およびアラシャンハダ遺跡についての石造の劣化状態調査が、人材育成を兼ねておこなわれる予定である。

・モンゴル拠点はどの機関か。

⇒ モンゴル文化省、文化遺産センターとなっている。

3. 被災文化遺産復旧に係る調査について

事務局

報告:文化遺産国際協力コンソーシアムでは、2009 年度に被災文化遺産復旧に関する調査を行う予定である。近年、自然災害による被災文化財に対する復旧支援への要請が多くある状況を受けて、実際の事例をいくつかとりあげ、各国の防災体制、災害後の復旧対応、日本を含めた各国による国際協力実施状況などについての調査を行う。最終的に、日本による国際協力実施のあり方についての提言も盛り込んでいく予定である。内容については、5 月 8 日の企画分科会において検討され、最終的に中国、タイ、インドネシアを対象とすることが決定された。また、その他にも2カ国に対する調査が予定されており、これについては、現在公募中である。各国についての報告書を作成した後、5カ国の報告書をまとめた形の報告書を作成し、成果については2010年度の研究会などの場で報告していきたいと思っている。

【補足】文化庁の文化遺産保存協力事業として、拠点交流などを実施していたが、2009 年度については、被災文化遺産復旧に関する調査を実施する予定である。この事業については、2カ年計画で考えており、2010年度は、各国による文化遺産国際協力体制の状況について実施したく考えているが、これについても合わせてご意見いただけたらと思う。

4. その他

バーミヤーン調査について

山内和也（東京文化財研究所）

2009年6月26日から7月9日にかけてアフガニスタンのバーミヤーンへ、清水真一、前田耕作、有村誠、山内和也が派遣された。今回の派遣目的は、これまで一般の住居に一時的に保管されていた発掘遺物、壁画片などを、新たに収蔵庫へ移すことであった。また、壁画の保存修復については、2年前に保護強化のために壁画片の剥落止めを施してきたが、今回はその成果が確認された。今後の協力については、将来バーミヤーンをどう公開していくかを踏まえて検討する必要がある。今回の調査で新たな石窟の亀裂による壁画片の落下が確認されるなど、新たな課題も多い。これらの処置も総合的に考えながらアフガニスタン人専門家の養成が求められていると考えている。

【補足】バーミヤーンでは、新たに17歳から27歳まで30名近く集めた場で、今回のチームにバーミヤーンについての講義依頼があったので、前田、山内は講演をおこなった。これは、現在までなかった動きであり、バーミヤーンの将来の観光化を意識した新たな変化である。バーミヤーンの知事も日本隊の来訪を非常に歓迎しており、継続的に調査協力を実施しているフランス、ドイツなどとの関係でも現地への継続的渡航を可能とする環境が整うことが望まれる。

- アジヤンタ遺跡保存修復にむけての専門家会議開催案内
- 2009年9月に北京で開催されるアジアの文化遺産保存理論・研究についての国際会議案内
- 講演会「文化遺産国際協力の今後の展望」松浦ユネスコ事務局長講演開催案内

5. ウズベキスタンにおけるカラテペ遺跡発掘調査報告

加藤九祚(国立民族学博物館 名誉教授)

報告: 中央アジアの仏教遺構について概観する。また、いくつかの仏教遺構から出土された遺物などを検討しながら、クシャン王朝の成立について「クシャン」という名について論説も紹介する。

アルチャヤン、ハナカ・テパ、カラベグ・テパでの発掘がこれまで現地の考古学者を中心におこなわれてきた。カラベグ・テパのみが遺構状況がよいので、発掘を考えたいが、資金的な問題がある。長期間にわたり加藤が発掘をおこなっているカラテペ遺跡では、観光をしながら発掘を経験するという形を試み、実施したところ、4名が集まったので、実施したが、考古学発掘と観光の関係については、現在再考中である。

ファヤズテパ遺構については、1968年にL.I.アリバウム氏によって発掘が開始され、近年では、ユネスコ日本信託基金プロジェクトで支援を受けて保存修復が終了している。しかし、保存修復後とその前の状況は大きな違いがあり、その保存修復の難しさを認識しているところである。この遺構における発掘調査で明らかになったのは、生活空間と思われる部分、寺院、僧院といわれる部分、そしてストウーパなどである。三尊仏や壁画片などのほとんどの遺物は内陣といわれる寺院の一角から出土しているが、まだ大乘仏教がここで成立していた可能性は認められていない。ファヤズで出土したストウーパは、その基壇が四角形であるが、ここに大きな議論があり、これは大乘とともに基壇が円形から四角形に変化したという説につながる。

ダルヴェルジン・テパ遺跡では、菩薩像、三角帽を被った供養者像などが出土している。アジナ・テペ遺跡では、涅槃像が出土しており、この遺跡もユネスコ信託基金により調査発掘、保存修復がなされている。アクベシム遺跡(キリギスタン)においては、多くの仏像が出土している。近郊のクラスナヤ・レーチカ遺跡を発掘していた際には、アクベシムで拾得されたであろう遺物をいくつかみた。クワ寺院では、第3の目(第3の目は目と平行する)をもつ神像が出土しており、これはチベット仏教の影響があるのだろうか、と考えられるが、いろいろ検討しなければならないものであろう。ヒシュト・テパ遺跡では、携帯用ストウーパが出土している。タジキスタンのパミール地方のリヤンガルの岩画は、紀元1世紀頃とされるが、仏教のストウーパを表したものと考えられる。

カラテペ遺跡で発見した遺物のなかには、壁画片、柱頭、仏手などがある。その中には、仏教との関係が不明な図像などの発見されており、謎は残ったままである。また、石灰岩に彫られたいくつかのガンダーラとつながるもの、ガンダーラとは離れたもの、という像が多く出土している。ギリシア・ローマの影響がみられるような土器の発見されている。カラテペ遺跡の発掘では、僧房の寝

台なども発掘されている。ダルヴェルジン・テパのツィタデリ(内城)の新発見としては、現在の地表面から約9メートル下から発見された部屋跡がある。タジキスタンのクルガンチュベ付近では、クシャン朝のコイン 660 個(青銅製)が発見されている。カラテパ僧院の現場には自費で「加藤の家」とよばれるセンターを建立した。

・韓国からカラテパ遺跡を発掘したいとの要望があったようだが。

⇒ 韓国には、カラテパ遺跡は広大なので、一部を発掘したらいいのだろうか、と伝えている。

・カラテパの発掘については発掘しながらも、意識してこの7～8年は保存に努めてきた。できれば覆い屋を建設することも考えて、発掘と保存を同時に進められたらいいと思っている。遺物の分析もいまだ進めていない状況であるし、今後調査を行われなければならない部分も多い。

・クシャン朝研究については、日本の東洋史研究によって進められてきた一学問分野であり、カラテパ遺跡とは、歴史を明らかにするうえで非常に重要な遺構であるという認識がされている。

⇒ 現在までは、薬師寺をはじめとして様々な方々から寄付をいただいて進めてきたプロジェクトであるが、後2年ほどしか予算の見通しはたっていない。ぜひ、何ができるかということについては、今後ともご検討いただきたいと思っている。

・将来にむけて考えていくべき問題であると認識される

以上